

読書感想文入賞作品

最優秀賞

『日日是好日』 森下典子 著

今まで過ごした日常は

物質化学工学科2年 齊藤 みづほ

私の親戚のおばさんは茶道の先生だ。そんなこともあり、私は四歳頃から茶道を教えてもらっていた。中学校の間と高専に入学してから一年目は部活動が忙しくお休みしていたが、また今年から始めることになった。そんな時に母から私でも読みやすい茶道について書かれた本があるからと勧められた「日日是好日」という本。ちょうど映画化もされていたため興味があり読むことに決めた。

この本は、主人公の森下典子がひょんなことからこの美智子と、近所の武田先生の茶道教室に通うことになることから始まる。就職につまずき、失恋、父の死という悲しみのなかで、気が付けばいつも典子のそばには茶道があった。これは茶道を軸に典子が大人になっていく日々を描いた本だ。

私はこの本を読み終わったあと、今まで見てきた世界と今日に映っている世界は全く別なもののように感じた。本の題目でもある「日日是好日」という言葉は本文中にも何度かでてくる。これは元々禅宗の言葉で「毎日が素晴らしい日」という意味だ。最初、私はこの言葉の意味を深く捉えていなかった。だが、主人公は季節の色々な移り変わりや自分の置かれた状況など、どんな日もその日を思う存分味わうことで、茶道とはどういう「生き方」なのかに気付く。そうやって人間はたとえ周囲が「苦境」とよぶような事態に遭遇したとしても、その状況すらも楽しんで生きていければどんな日も「いい日」になる。これこそが「日日是好日」の本当の意味だと気付いた時、私は「何も知らなかった、気付かなかった」世界の色がより鮮やかに変わった気がした。主人公が身の回りの出来事から「日日是好日」の意味に気付けたように、人間はそのことに気付く絶好のチャンスの連続の中で生きているのではないかと思う。私は今まで何年も続けてきた茶道はそんな事に気付けるきっかけを与えてくれていたのかと思い、驚いた。もう少し早くこの本に出会えていたらと思う。

本文に「会いたいと思ったら、会わなければならない。好きな人がいたら、好きだと言わなければいけない。花が咲いたら、祝おう。恋をしたら溺れよう。嬉しかったら、分かち合おう。幸せな時は、その幸せを抱きしめて、百パーセントかみしめる。それがたぶん、人間にできる、あらんかぎりのことなのだ。」

とある。大切なことに気付ける絶好のチャンスの中にいるのに、毎日をただ消費するように生きていた自分にこの言葉を教えてあげたいと思った。「ただの」日常なんてないのだ。心の持ちよう、感じ方を少し変えるだけで日常がこんなに素晴らしいものに見える。それを教えてくれたこの本に出会えたことを心から感謝したい。

この本を読むことで習い事くらいにしか思っていなかった茶道をもっと身近に感じる事ができた。もちろん茶道をしたことがない人にでも楽しめると思うし、学べることは茶道の面白さだけではないので皆にぜひ読んでほしいと思う。

注意

図書の利用にあたっての注意

本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

汚損・破損された場合は弁償していただきます。

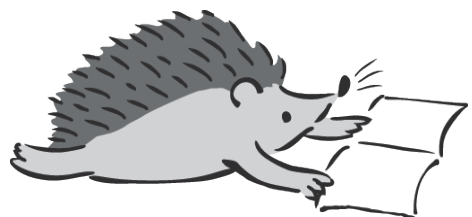
返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。

本（雑誌）と学生証をカウンターへ持って来てください。

手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。

図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。



優秀賞

『君の臍臓をたべたい』 住野よる 著

人の力——君の臍臓をたべたいを読んで——

電気工学科2年 寶持 和馬

「ねえ、君はさ、本当に死ぬの？」

話の中の「僕」が山内桜良に聞いた言葉だ。自分も読んでいて、余命宣告を受けた人とは思えない明るさと笑顔に驚かされた。それと同時に、自分が余命宣告を受けたら、現実を受け入れ、前向きに生きる強さが自分にはあるのかと考えた。きっと今の自分には想像もつかないほどの恐怖感に押し潰されて、「周りを悲しませたくない」という思いはすぐに忘れてしまうだろう。そんな自分には山内桜良は輝いて見えた。

この「君の臍臓をたべたい」という小説では、主人公である「僕」が病院でクラスメイトの山内桜良の「共病文庫」という文庫本を偶然拾う。その中には、山内桜良が臍臓の病気で余命が長くないという内容が綴られていた。そして「僕」がその本を読んだことにより、身内以外で山内桜良の秘密を知る初めての人物となり、山内桜良が気を遣わずに話をできる存在となっていた。二人で話をしたり、旅行へ行ったりするうちに、お互いに自分の欠けている部分を持っていることに気づき、心を通わせながら成長していく。しかしある日余命を全うすることなく通り魔に刺されて亡くなってしまふという話だ。

私はこの話を読んで、「僕」と山内桜良の関係をとても羨ましく思った。なぜなら、お互いに自分の欠けている部分を持っている存在に巡り会うのはそんなに簡単ではないからだ。自分にはそんな存在を必要としていた時期があった。

私は中学三年生の時に、野球部のキャプテンをしていた。私は特別な才能がある訳でもなかったので、チームを引っ張っていく実力がなくて、最初はとても不安だった。しかし、チームメイトの一人に、とても実力のある選手がいた。私はその選手にいつも憧れを抱いていて、少しでも近づけるように努力をすることができた。中学の野球部が終わって気づいたのは、「憧れの存在というのは、大きな力を与えてくれる」という事だ。私は野球でこの事に気づいた。「僕」がこのまま山内桜良と何の関わりを持たずに生きていたら、きっと誰とも関わろうとせず一人で生きていこうとしていただろう。そんな「僕」が人に心を開こうとするほどの力があるんだと改めて分かった。心を開くことができた「僕」の恩人と言っても過言ではない山内桜良と残り短い時間を二人が過ごせば、お互い得られるものはたくさんあったはずだ。しかし、その短い時間を通り魔によって消されてしまった「僕」の喪失感は計り知れないものだったと思う。大切な人が奪われた悲しみは深く、簡単には癒えることはない。でも、今まで過ごしてきた日々は「僕」をととても強くさせていた。桜良の願いだった「僕」が苦手だった桜良の大親友の恭子と友達になろうと恭子に歩み寄ったのだ。まるで「僕」の中に桜

良が乗りうつったかのように成長をした「僕」を見て、人は自分一人じゃ成長できないんだと分かった。

この「君の臍臓をたべたい」を読んで、人のつながりは時間がすべてではないと分かった。きっと、どんな人にも自分には無いものを持っていて、補い合うことが大切だと「僕」と桜良は教えてくれた。また二人が出会ったら、桜良はこう言うだろう。「次はどこを旅行する?」と。

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 伊藤亜紗 著

障害者から見た「本当の障害」とは何か

情報工学科1年 北畑 祐希

私は今回、読書感想文を書くにあたって、「目の見えない人は世界をどう見ているのか」という本を読んだ。視覚障害者へのインタビューをもとに、目の見えない人がいかにして周囲の環境を知り、目の見える人の社会の中で生きているかをまとめた本だ。人間の受けとる情報の九割を司っているとも言われる視覚を失った時、人はどうなるのか。つまらなくはないのだろうか。そんな単純な疑問から、私はこの本を手にとった。

この本の序章を読み終えたとき、私の頭の中は驚きに満ちていた。まず、「目の見えない」ことと、私たちが「目をつぶる」ことは、まるっきり違うことだという。筆者はそれを「四本脚の椅子と三本脚の椅子の違いのようなもの」と例えた。四本脚の椅子から単純に「視覚」という一本の脚を取ってしまえば、その椅子は傾いてしまう。しかし、脚の配置を変えれば、言い換えるともとから「視覚」はないものとして感覚のバランスを考えられれば、三本脚でも椅子は十分に支えられる。目が見えなくとも、大きな不自由をせずに生きられる、ということだ。スポーツも、絵画の観賞も、視覚以外の感覚があれば不可能ではないことなのだ。

この本の文章の中で最も私が共感できたのが、「目の見える人の世界は二次元である」というところだ。私は前々から、自分が見たままを描いたはずの風景画が、どうしても平面に見えることを不思議に思っていた。この本によれば、それは私たちが物体をある一面からしか捉えられないかららしい。視覚情報がむしろ余計なものとなり、私たちの見る世界には死角が生まれてしまうという。

一方、目の見えない人は、情報の少ない分、ある種の余裕が生まれ、空間を想像することができるという。つまり、私たちからすれば死角である部分さえ、彼らは捉えているのだ。目の見えない人は案外、物体を立体的なものであると、私たちより理解している。それを聞いていると、目が見えないことがうらやましいとすら感じられた。

ここで、現在の社会における視覚障害者の立ち位置を考えることとしよう。視覚障害者含む障害者は今、「可哀想な人」というレッテルを貼られてしまっている。たしかに、目が見えない、耳が聞こえない、と言われると、障害はネガティブなもののように思える。

しかし、この本を最後まで読んだ私に言わせれば、目が見えないことは一つの「キャラ」に過ぎない。目が見えない人は、視覚以外の感覚でちゃんとバランスをとっているし、それ以外の、性格などの面において彼らは私たちとほぼ同じといえる。彼らにとって、私たちからの「配慮」は私たちとの距離を感じるだけの邪魔者でしかないだろう。「目が見えない」ことは、「運動オンチ」のような、「笑ってもいい個性」と何ら変わらないのだ。

この本を通して私は、すべての「ちがひ」は人間の生み出した余計な憐れみのもとであると考えた。「目が見えないなんて可哀想。自分は見えてよかった」「女性は体力がなくて大変だなあ。自分は男でよかった」などのような、憐れみとそこから生まれる優越感のようなものが、差別や偏見を作っている、ということだ。だが、結局人間は、平等に生きられさえすれば「ちがひ」は何のハンディキャップでもなくなる。今は理解を求めなければならないかもしれないが、いずれ余計な「配慮」はこの世から消えていくだろう。

『心晴日和』 喜多川泰 著

心が晴れた記念日～心晴日和～

物質化学工学科1年 原 朱眸

この物語の主人公である美輝は、クラスの女子からいじめられている14才の少女。学校に行こうとすると、頭が痛くなったりお腹が痛くなったりするため、病院に行くことになる。

そして、病院で井之尾という不思議な老人と出会い、「春を感じるものの写真を撮ってほしい」というお願いをされるという所から、ストーリーが展開していく。普段は学校に行かず、外へも出なかった美輝だったが、老人のお願いを聞くために外へ出てみると、通学路には春があふれていることに気がついた。

この場面で美輝は、その気づきを老人に報告する。すると老人は、「春を感じるものを探して歩く人には、春を感じさせるものがドンドン目に飛び込んでくる。結局、不幸な人は自分の方から積極的に自分を不幸にするものを集めて生きているということだ。」と、教えた。その後、美輝は少しずつ考え方をポジティブに傾け始める。

そんな中で、いじめの主導者である女の子が、実は塾でいじめを受けている現場をたまたま見かける。このような出来事にも悩み、井之尾に相談しながら、不登校を解消していき、立派な社会人になっていく美輝の姿を見てみると、本当に応援したくなった。

それにしても、井之尾という老人は美輝に色々な話をしていた。やはり老人に学べということだろうなと私は思った。一昔前よりも老人に学ぶという機会が減っていると感じる。ぜひ身の回りの老人に格言を教えてもらいたい。

この物語の全体像としてはそんな感じだが、中でも私が一番心に残った場面がある。それは、美輝が母親に、「父親との出会い」について問う場面だ。同じ学校、会社だったという、普通の出会いではなく、両親は数々の偶然が重なって運命的な出会いを果たしていることを美輝は知る。どの偶然が欠けていても、両親は出会わなかったし、美輝が誕生することもなかった。その事実を知った美輝は、更に「自分」の大切さを理解し、希望の道へと進む活力へと変える。

驚くことに、両親の出会いについて聞いてみたらいいと言ったのも井之尾であった。美輝は、井之尾が予言者なのではないかと考えたが残念ながら井之尾の正体は全て読んでも明かされなかった。

ストーリーの最終章には、28才の美輝が、両親と同じようにある男の人と運命的な出会いを果たす場面がある。

例えば、電車に間に合わなかったが、数年ぶりの友達と再会できた等のように、偶然は必然であるのだと改めて感じた。ちなみに、スピリチュアル的には、「偶然は存在せず、全て意味があり、必然的に起きている。」と考えられ、「シンクロニシティ」と呼ばれているそうだ。そう考えてみると、不登校少女の美輝が、老人井之尾に出会って一人前の大人になるというのも必然だったと考えられる。井之尾と出会わなければ、不登校は改善されなかっただろうし、美輝にとって井之尾は本当の意味でのキーパーソンだったのである。

今回の物語では、老人井之尾によって、自分も数々の事に気づかされ（ポジティブな言葉で人生は切り開ける…など）同時に、偶然についても興味を持つことができたし、この本に出会うのも必然だったのかなとも、最後の最後まで考えている自分がいる。それと何より、主人公の美輝に共感できた。中学一年の頃、あまり学校に行きたくないと思っていたので、主人公と同じ悩みを持ったこともあった。これからも、共感でき考えられる本に出会えることを、期待したいと思う。

図書館だより77号の表紙絵について

図書館だより77号の表紙絵は、美術の授業の作品で教員より推薦された13点の中から教育支援センター運営委員会で投票により5点選出しました。13点すべての作品が図書館ホームページでご覧になれます。アニメーション付きのものもあります。